

他者の産出と自己の誕生肯定

森岡正博の「誕生肯定」概念の批判的検討

居永正宏*

1. はじめに

森岡正博は2007年の論文「生命学とは何か」において自らの提唱する「生命学」とはいかなる営みなのかを描き出し、2011年の論文「誕生肯定とは何か」においてその「生命学」の中心概念の一つである「誕生肯定」について独自の考察を行なっている。本論では、森岡の示す「誕生肯定」のあり方を「自己の誕生肯定は、他者を産み出しその誕生を肯定することによってこそ可能なのではないか」という視点から批判的に考察したい。そして同時に、「誕生肯定」の概念を入り口として、生命の本質の一つとしての「他者の産出」が森岡生命学全体に欠けていることを示したい。

2. 森岡生命学における「誕生肯定」の概念

森岡は1988年の『生命学への招待』以来、著書や論文を通して「生命学」という営みを提唱している。その基本となっている考え方は、「自分を棚上げにすること」が許容されている「学問」という知の営み¹に対して、「自分を棚上げにしない」やり方の知の探求を目指し、その際に「生命」を中心に据えて考える、というものである。ここで「自分を棚上げにせずに」といわれるとき、単に「社会的・学問的に意義のあるテーマについて剽窃や捏造を行うことなく真面目に学問を行う」ということとは異なる点に注意が必要である。自分の実人生とは直接何の関係もなくとも、例えばあくまで仕事として誠実に物理学の実験を行うことはできるし、社会調査を行うこともできる。「生命学」が立ち上がってくるのは、それらの営みと自分の実人生との関わりにおいてである。

現時点で「生命学」についてまとまった記述がなされているのは、2001年の『生命学に何ができるか』の最終章と2007年の論文「生命学とは何か」である。両者の記述は重なる部分が多く、また後者の論文の方が発展した思索を示して

* 大阪府立大学大学院人間社会学研究科博士後期課程在学

¹ 森岡の著作の中で典型的なイメージは「フェミニズムを勉強する男性研究者」だが、私が個人的に強い印象を受けたのは「タバコを無意識にポイ捨てる環境倫理学者」の実例である。『宗教なき時代を生きるために』199-202頁参照。

いるので、まず后者の「生命学とは何か」を参照して森岡の提唱する「生命学」の概要を確認していきたい。

2. 1. (森岡) 生命学の概要

生命学は「自分を棚上げにしない」ということを基本的発想としているが、そこには生命学を行うそれぞれの「自分」が不可欠の部分として含まれている。したがって、生命学には基本的発想の部分とそれを受けた各個人の生命学の「掘り下げ」があることになる。まず、森岡が定式化する生命学の基本的発想は次のようなものである。

生命学とは、自分をけっして棚上げにすることなく、生命について深く考え表現しながら、生きていくことである。²

ここでのポイントは「自分を棚上げにしないこと」、「表現すること」、「生きていくこと」の3つである。はじめの「自分を棚上げにしないこと」について重要なのは、それは理想的な「知行一致」を目指すのではなく、どこまでも「知行不一致」でしかありえない自分から目を逸らさない、という点である。次の「表現する」というのは、文筆活動、身体表現、社会運動、ケア、芸術などの多様なあり方を含むものである。最後の「生きていく」というのは、考えたり表現したりしたことを自らの実人生にフィードバックし、自らの人生を自らの生命学の「実験台」とするということである。これらの3つの側面が一体となって、生命学の営みが展開していくことになる（「生命について深く考え」というときの「生命」とは何かについては、後の論点と関係してくるので、ここで改めて論じたい）。

このような生命学の基本的発想を受けて「各自の生命学」が開始されることになる。森岡はそれを次のように定式化している。

各自の生命学とは、生命学の基本的発想と出会うことをきっかけとして、自分にとっての生命学とは何かを発見し、掘り下げ、展開していく終りのないプロセスのことである。³

では、森岡自身の生命学とはどのようなものなのだろうか。森岡はそれを「悔いなく生き切るための生命学」と名付け、次のように定式化している。

² 「生命学とは何か」450頁。

³ 同書449頁。

(森岡にとっての) 生命学とは、何らかの生きづらさをかかえた人が、限りある人生を、他者とともに、悔いなく生き切るために何をすればよいのかを、自分をけっして棚上げにすることなく探求しながら生きていく営みのことである。⁴

ここでは、先の基本的発想に対して、1) 生きづらさ、2) 限りある人生、3) 他者ととともに、4) 悔いなく生き切る、という4つの要素が付け加えられている。

まず、「他者ととともに」という点についてはさしあたり特に問題はないと思われるが、一点だけ、これは単に「人間は社会的存在であるから他人とともにでなければ生きられない」というような人間の条件としてではなく、「悔いなく生き切る」ための積極的なあり方として言われている、ということを確認しておく(しかし率直に言って、当論文のこの後の記述、また森岡生命学全体から立ち上ってくるのは、他人と切り離された孤独な実存の呻きであるように思う。この点は後述)。

「生きづらさ」について森岡が具体的に挙げるのは、1) 自分が死すべき存在であるということ、2) 際限のない欲望に駆り立てられること、3) 自分のセクシュアリティが特殊なものかもしれないこと、の3つである。⁵

このうち「自分が死すべき存在であるということ」は、上記の「限りある人生」と重なっている。森岡はその主著である『無痛文明論』でも独立した章を設けて「私の死」を論じているように、この「限りある」という点に特にこだわりを見せる。それは「悔いなく生き切る」という表現にも現れている。単に「生きる」のではなく「生き切る」という表現には、限りある生を生きる私が、その「限り」がくるのを受動的に待つのではなく、能動的にその「限り」へと向かっていく、さらには自らその「限り」を実現する、というニュアンスが読み取れる⁶。この「悔いなく生き切る」ことの具体的なあり方として、森岡は次の三つのあり方を示している。

⁴ 同書 457 頁。

⁵ 同書 458-459 頁。

⁶ さらに深読みすれば、「私の生はその「限り」において「切れて」いなければならない」ということを含意しているようにも思われる。いずれにせよ、この「切る」という表現は、後で指摘する森岡生命学における「産み」の欠如と響きあっている。

- A. 人生まるごとの肯定：「これまでの人生には様々な後悔があり失敗があったのだけれども、限られた人生を自分がこのように生きてきたということ全体についてはこれでよかった」⁷
- B. 誕生肯定：「生まれてきて本当によかった」⁸
- C. 欲望でもなく絶望でもなく：「これ以上生き続けていてもいいし、これ以上生き続けなくてもよい」⁹

ここで登場するのが、2011年の論文「誕生肯定とは何か」で詳しく論じられる「誕生肯定」の概念である。そして、「生命学とは何か」においては上記の三つは単に並列的に記述されているのに対して「誕生肯定とは何か」ではより詳細な分析が行われ、AとBが一続きのものとして記述されたり、「サバイバルの肯定」が両者の前段階として導入されるなど、発展した議論が行われているので、そちらの記述を参照しながら、ここで「誕生肯定」の議論へと移りたい¹⁰。

⁷ 同書 465 頁。

⁸ 同書 466 頁。

⁹ 同書同頁。

¹⁰ 以下本論では「誕生肯定」概念を中心に論じていくため、最後の「C. 欲望でもなく絶望でもなく」については論じる余裕はないが、それについて気になる点をここで簡単に指摘しておきたい。森岡はこの「欲望でもなく絶望でもなく」というのは「これ以上生き続けていてもいいし、これ以上生き続けなくてもよい」という心境を目指して生き切ることであり、それは悔いなく生き切ることの一つの形だと述べた上で、「遭難した登山家が雪の中に埋もれたまま救助のヘリコプターに合図することをやめて自らを死ぬに任せる」という印象的な例を挙げている（同書463頁）。私がこの例を読んで連想したのは、『悪霊』のキリーロフである。例えばキリーロフは次のように言う。

「自由というのは、生きていても生きていなくても同じになるとき、はじめてえられるのです。これがすべての目的です。」（『ドストエフスキー全集』11巻116頁）

「生きていても、生きていなくても、どうでもいい人間、それが新しい人間なんです。苦痛と恐怖に打ちかつものが、みずから神になる。そして、あの神はいなくなる。」（同書同頁）

このキリーロフの示す思想と森岡の「これ以上生き続けていてもいいし、これ以上生き続けなくてもよい」との類似は非常に興味深い。またキリーロフは次のようにも述べており、それは私には森岡が『無痛文明論』の「私の死」の章において記しているホテルの一室での体験（324頁～）を髣髴とさせる。

（スタヴローギン）「すべて？」

（キリーロフ）「すべてです。人間が不幸なのは、自分が幸福であることを知らないから、それだけです。これがいっさい、いっさいなんです！知るものはただちに幸福になる。その瞬間に。あの姑が死んで、女の子が一人で残される—すべてすばらしい。僕は突然発見したんです」

「でも、餓死する者も、女の子を辱めたり、穢したりするものもあるだろうけれど、それもすばらしいのですか？」

2. 2. 「誕生肯定」について

森岡は論文「誕生肯定とは何か」の前半部分でまず「誕生とは何か」についてハイデガーやアーレントを参照しながら考察を行なっているが、その初めにまず、「私がここで扱おうとしているのは、「私の誕生」のことである。生物の誕生や、他人の誕生のことではない。今ここに生きている私自身が、この世に誕生したことについて考察しようとしているのである」¹¹と述べ、その誕生論の範囲を誕生した者自身にとっての自らの誕生に限定している。その意味で、自らの誕生論を「内在的誕生論」と呼び、「本人の視点からは切り離された外在的な視点から」誕生を論じる「外在的誕生論」とは区別している。

その「内在的誕生論」が示す誕生の特徴は次の三つである。1) 気がついたら私は誕生していた¹²、2) 何かわからないところから私は生まれた¹³、3) 生まれてきたことそれ自体に関して私は受動的な位置取りしかすることができない¹⁴。そして、一点目の「気がついたら私は誕生していた」という誕生の特徴に基づいて、内在的誕生論の基盤としての「人生」が次のように定義される。

人生とは、「気がついたら私は誕生していた」という現在完了形の気づきによって、そのつど呼び起こされ、一気に見通される、私の経験の集積のことである。¹⁵

そして、先の「人生まるごとの肯定」における「人生」は、この意味での「人生」であるとされ、誕生肯定はその「人生まるごとの肯定」を通して実現するものとして位置づけられる。

「すばらしい。赤ん坊の頭をぐしゃぐしゃに叩きつぶす者がいても、やっぱりすばらしい。叩きつぶさない者も、やっぱりすばらしい。すべてがすばらしい、すべてがです。すべてがすばらしいことを知る者には、すばらしい。もしみなが、すばらしいことを知るようになれば、すばらくなるのだけれど、すばらしいことを知らないうちはひとつもすばらしくないでしょう。ぼくの考えはこれですべてです、これだけ、ほかには何もありません。」（『ドストエフスキー全集』11巻235頁）

さらに、このキリーロフが「お産」について次のように述べている点も、本論が後で論じる、森岡生命学における「産み」の欠如と重なって見える。

「悪いけど、ぼくはお産はまずくてね」キリーロフが物思わしげに答えた。「いや、僕がお産をするのがまずいというのじゃなくて、お産をさせるようにするのがまずいのか...でなければ...いや、どうもうまく言えない。」（同12巻195頁）

¹¹ 「誕生肯定とは何か」175頁。

¹² 同書183頁。

¹³ 同書186頁。

¹⁴ 同書同頁。

¹⁵ 同書183頁。

「誕生肯定」とは、これまで生きてきた人生をまるごと肯定すること（＝人生まるごとの肯定）を通して、私が生まれてきたことを肯定することである。

16

ここで、「生命学とは何か」においては単に並列されていた「人生まるごとの肯定」と「誕生肯定」が、前者に基づいて後者が成り立つというような関係にあるものとして捉え直されている。（「誕生肯定とは何か」においては触れられてはいないが、この筋に従っていけば、「欲望でもなく絶望でもなく」についても「誕生肯定」に基づいて成り立つものと捉え直すのが自然だろう。）

ここで森岡が問題とする点が3つある。一つは「破断」の経験、もうひとつは「誕生肯定」に対する「誕生否定」、最後に「人生まるごとの肯定」から「誕生肯定」への移行の意味である。

「破断」とは、「レイプや戦争被害」に遭遇した際に「自分の人生がその時点で暴力的に断ち切られたような状態になり、未来へと前向きに生きていこうとする力が奪われてしまうことである」¹⁷。そのような状態に陥ったとき、それでも人はその破断を含む人生をまるごと肯定できるのか、というのが森岡の設定する問いであり、ニーチェの永劫回帰などを参照しながらそれに対していくつかの回答を与えている。そして、「人生まるごとの肯定」の前段階として、「そのような破断を含む人生を生き抜いてきてよかった」という「サバイバルの肯定」を設定し、そこから「人生まるごとの肯定」へと進む道を探るという道筋を示している¹⁸。

「誕生否定」とは、「生まれなければよかった」と思う（思わされる）ことであり、森岡はそのような思いをひきおこすような行為や制度を「悪」の典型例として位置づけている。なぜなら、「誕生否定」は私が悔いなく生き切るための「誕生肯定」の可能性を閉ざすものだからである。

最後に、「人生まるごとの肯定」から「誕生肯定」へと進むのはなぜなのか、そしてそのとき一体何が起きているのか、という問いである。自分の人生をまるごと肯定できればそれで十分な気もするが、なぜそこからさらに「生まれてきてよかった」という段階に移行する必要があるのだろうか。森岡の回答は、それは私が「私はなぜ生まれてきたのか？」という問い、つまり「生まれてきた意味」の問いに、自分独自の誕生肯定によって答えるためである、というものである。

¹⁶ 同書 189 頁。

¹⁷ 同書 196 頁。

¹⁸ 同書 199 頁。

…私はなぜ生まれてきたのかと言えば、私の人生というこの世に一個しかない人生によって達成可能なこの世に一個しかない誕生肯定の形をこの世で達成するために生まれてきた、ということなのである。¹⁹

これが、現時点での森岡の生命学とその中心概念である「誕生肯定」の到達点である。省略した議論も多くあるが、ひとまずこれでまとめとして、次に、この「誕生肯定」論の批判的検討に移りたい。

3. 「誕生肯定」論への批判的コメント

3. 1. 「破断」論について

上で見たように、「誕生肯定とは何か」では「レイプや戦争被害」といった「破断」を含む人生をまるごと肯定することは可能なのが問題とされていた。まずこの「破断」論について二つの疑問点を提出したい。

森岡は「破断」が人生まるごとの肯定を阻んでいると言っているが、それは破断がない人生においては人生まるごとの肯定が容易に実現することを意味してはいない。つまり、特に不自由のない恵まれた環境において、大きな破断にも遭遇せずに無事に人生を送ってきたとしても、それだけで自動的に人生まるごとの肯定に至るわけではない。森岡自身が言うように、「いくら他人を搾取して、競争に勝って、社会の上層部に到達したとしても、その心はまったく充足してないし、幸せになったとも思えない」²⁰状況はいくらでもある。逆に、破断に見舞われた人が、その破断の経験がなければなしえなかった人生の肯定のかたちへと至ることもあり得る（これは『無痛文明論』のモチーフでもある）。そうだとすれば、単に「破断」をどう乗り越えるかではなく、破断があるにせよないにせよ、「人生まるごとの肯定」とはどのようにしてありえるのかを積極的に示すことが必要なのではないか。森岡は「（誕生肯定に至るためには）何をしてはいけないのかについては、ある程度のことは言えるが、何をすればよいのかについては、ほとんど何も言えないのである」²¹、と述べており、おそらく「人生まるごとの肯定」についても同じように考えていると思われるが、本当に「何をすればよいのか」について言うべきことはないのだろうか。後でも述べるように、この問いに対して本論では、「他者の産出」が「人生まるご

¹⁹ 同書 207 頁。

²⁰ 「生命学とは何か」 458 頁。

²¹ 同書 474 頁。

との肯定」および「誕生肯定」に至るために「すればよいこと」であると主張したい。森岡は「破断」にあった上での人生の肯定のあり方を次の三通りに分けている²²。即ち、1) 破断は否定するがそれ以外の人生は肯定する、2) 破断をくぐり抜けた私のこれまでの生を肯定することから翻って破断自体も肯定する、だが破断は繰り返されてはならない、3) 破断も含めてすべて肯定する、の三つである。私は、これらとは別に、破断の乗り越えには「他者の産出」に基づいた第四のかたちがあると考えたい。それは、「私の人生の破断はやはりない方がよかった。しかしそのような無意味な悪を被った私の生によって産み出された私の生を引き継ぐものの生を私が無条件で肯定する限り、私はその肯定の主体であり同時にその肯定の客体を産み出したものとしての私の生を、破断を含めてまるごと肯定する」、というような肯定のあり方である。そして、「破断」の有無にかかわらず、この他者の産出に基づく肯定こそが、人生まるごとの肯定、そして誕生肯定の積極的なあり方の基本的なかたちなのではないだろうか。

さて、「破断」の経験がないことがそのまま「人生まるごとの肯定」に繋がるわけではない理由の一つは、具体的な出来事としての「破断」がなくても私の生の条件としての「生きづらさ」は存在するからである。この「破断」と「生きづらさ」の関係が二つ目の疑問点である。先に見たように、「生命学とは何か」において森岡は「生きづらさ」を自身の生命学の定義に組み込んでいた。それは具体的には、1) 自分が死すべき存在であるということ、2) 際限のない欲望に駆り立てられること、3) 自分のセクシュアリティが特殊なものかもしれないこと、の3つであった。これらの「生きづらさ」は、「破断」であるレイプや戦争被害といった具体的な出来事とは別物であるから、そのような破断の有無に関係なく私の生を覆っている。そうだとすれば、これらの「生きづらさ」にどのように向き合うのかということが、「人生まるごとの肯定」にとって、「破断」の乗り越えと同じかそれ以上に重要な問題であるはずである。

上記の三つの「生きづらさ」は森岡生命学に特殊的なものとして挙げられてはいるが、少なくとも1) 自分が死すべき存在であるということ、2) 際限のない欲望に駆り立てられること、の二点は普遍的な「生きづらさ」と考えてもよいと思う。特に不自由のない恵まれた環境において、大きな破断にも遭遇せずに無事に人生を送ってきたとしても、自分が死ぬことや欲望に駆り立てられることから逃れることはできないからである。ここで再び問題は、私たちが欲望にまみれた死すべき存在であるという「生きづらさ」を乗り越えるために、私たちは積極的に何をなすべきなのか、という点に戻ってくる。繰り返しになるが、私はその答えを「他者の産出」に求めたいと考えている。そしてそ

²² 「誕生肯定とは何か」197頁～。

の際に気になるのが、森岡の「内在的誕生論」における「誕生」概念の狭さである。

3. 2. 「他者の産出」は「内在的」誕生ではないのか？

私が読む限り、「他者の産出」は「誕生肯定とは何か」における「誕生」概念からは排除されている。そしてそれは、この誕生肯定論だけではなく、森岡生命学全体の一貫した立場—明示的に述べられるわけではないが—であるように思われるのである。先にも引いたが、「誕生肯定とは何か」において森岡はまず次のようにその誕生論を限定している。

私がここで扱おうとしているのは、「私の誕生」のことである。生物の誕生や、他人の誕生のことではない。今ここに生きている私自身が、この世に誕生したことについて考察しようとしているのである。²³

森岡はこのような誕生論を「内在的誕生論」と呼び、「外在的誕生論」と区別する。

内在的誕生論とは、誕生した本人が、自分自身の誕生を本人の視点から振り返って、本人の誕生の本質を考察することである。これに対して外在的誕生論とは、本人の視点からは切り離された外在的な視点から、誕生した者の誕生について考察することである。²⁴

ここで森岡は、当人の生の外側から第三人称的に考察することを「外在」と呼び、それに対して自己の生に内在的に考えることを「内在」と呼んでいる。しかしそもそも、内在的誕生論が自己の生に内在的な「誕生」を考察するものだとなれば、それは先に見たような、「気がついたら」、「何かわからないところから」、「受動的に」産まれていたという「自己の誕生」だけではなく、自己がこのかけがえのない生において別のかけがえのないものを誕生させる（産み出す）という、「他者の誕生（産出）」も含まなければならないのではないだろうか。なぜなら、私が自己の生において他者を産み出すとき、それは上の「内在」と「外在」の区別でいえば、明らかに「内在」の領域に属するものだからである。私が私の生において他者を産み出すことについて私自身が考察することは、決して「本人の視点からは切り離された外在的な視点から」の考察ではな

²³ 同書 175 頁。

²⁴ 同書 176 頁。

い。そして、この自己の生に内在的な他者の産出を通して考えることで、森岡の問題とする「自己の誕生」についても、「気がついたら」、「何かわからないところから」、「受動的に」産まれたというような、「いまここにある実存の根底にある純粋な被投性」²⁵のようなものではなく、「生命を産む生命としての私が、他の生命によって産み出されたこと」として捉えることができるようになるのではないだろうか。

もちろん、他者自体は自己自身にとって純粋に内在的なものではなく、外在的なものだろう（ただし、ここでの「外在」は上の「第三人称的」な意味ではなく、同語反復になるが、「他者」的な意味である）。しかし、誕生とはその意味での外在的なものが自己の生の内在的な領域において産まれるという比類のない出来事なのであり、「誕生論」とはその比類なさとは一体どのような比類なさなのかについて論じるものでなければならぬのではないだろうか。少し先取りして言えば、誕生とは「内在」の外皮が破れて新しいものが産み出されることであり、そこで誕生したものは、私が能動的に産み出したものであると同時に私の生に外部から到来するものであり、私の生に内在的にとどまることなくそれを超えていくものであり、そのようなものとして私の生を意味付けるも

²⁵ 私は、そのような純粋な被投性を生命固有の出来事である「誕生」という言葉で呼んでいいのか疑問である。森岡は、「誕生」という言葉は、どうしても「出産」をイメージするから、「誕生肯定」と言われるとまるで「出産を肯定しなくてはならない」と言われているような不快感を感じるという声が寄せられることがある。もちろん冒頭で述べたように、本論文における「誕生」という概念は、この世への私の出現という意味でしかなく、母親からの出生という出来事とはまったく無関係であることは言うまでもない。それは「出産」よりも、むしろ「宇宙の誕生」というときの「誕生」の意味に近い。（「誕生肯定とは何か」209頁、傍点引用者）、と言う。しかし、「宇宙の誕生」は「生命から生命が産まれるという意味での本来の「誕生」に基づいた比喩的な表現に過ぎないのではないか。また、もし私の誕生が「宇宙の誕生」の意味での誕生だとすれば、私の誕生と対をなす「私の死」も「宇宙の死」の意味での「死」であることになりそうだが、そこに透けて見えるのは「私＝宇宙」という、生命的な営みとはかけ離れた独我論的世界観である。私が森岡の一連の著作を通して感じるのは、このような独我論的世界観と、「かかわり」や「ささえあい」を重視した生命観の間での揺れ動きである。そして私が読む限りでは、結局、唯一でかけがえのない〈私〉が、かかわりあいながら動的に進展する「生命」を飲み込んでしまっているように思われる。

ちなみに、上記の「母親からの出生という出来事とはまったく無関係」といういささか強調された表現に関連していると思われるのが、『感じない男』における森岡自身の「ロリコン」性の分析の次のような結論である。「すなわち、私の心の中にあつたのは、少女の姿をした「もうひとりの私」と性交することによって、私自身をもう一度誰の手も介さずに産みなおしたいという欲望だったのである。…（その理由は、）私の精子と、（想像上の少女である）私の卵子を使って、私のお腹から、新しい私が生まれるわけだから、産み直された新しい私は、「母親」から完全に切り離されることになる（からである。）…私が私を産み直すことによって、自分の存在を「母親」とは無関係なかたちで肯定すること。それによって、私を「母親」から完全に切り離すこと。ロリコンには、このようなドラマがはらまれているのだ。」（139-140頁、傍点引用者）。本論で指摘する森岡生命学における「産み」の欠如は、この「母親」の欠如（への願望）とも密接に関連していると思われる。

のではないのか。そしてその意味付けは、森岡の「内在的誕生論」における「誕生肯定」のような、「自己の誕生」に基づいた「内在」的＝自己完結的な意味付けとは異なる仕方で生を意味付けるものとして、「破断」だけではなく「生きづらさ」をも乗り越える可能性を含むものではないのだろうか。

次にこの「他者の産出」と「自己の誕生」肯定の関係を論じたいが、その前に、森岡生命学における「他者の産出」の欠如について、他の著作を参照して少し詳しく見てみたい。ここでは二つの論文「将来世代を産出する義務はあるか？」と「膣内射精暴力論の射程」を中心に取り上げる。どちらもその考察の対象が「他者の産出」に直接関わるものであるから、そこで「他者の産出」という側面が欠如していることがより際立って読み取れるからである。

3. 3. 「産出」の欠如

論文「将来世代を産出する義務はあるか？」は森岡と吉本陵の共著であり、全体としては、「将来世代の産出」の義務について前半部分で吉本がハンス・ヨナスを参照してそれを論じ、後半に森岡がリプロダクティブ・ライツの立場を軸にそれを論じている。内容的には両者の議論は独立しているので、後者の森岡の議論だけをここでは取り上げたい。

「将来世代を産出する義務はあるか？」で森岡が立てる問題は次のようなものである。

以下で行いたいのは、一方に「人類には将来世代を産出する義務がある」という主張をおき、他方に「産む産まないは女が決める」というような個人の決断を最重要視する個人主義の主張を置いた上で、その両者の関係性を吟味することである。²⁶

そして森岡の判定によれば、結局「個人の自由」が至上の価値であることは揺るがず、「産まない」という個人の決断を覆すような「個人よりも上位の価値をもつ実体」²⁷は認められない。したがって、次のような結論に至る。

「人類は持続的に維持されなくてはならない」という考え方には決定的な根拠がないと私には思われる。また、すでに述べたが、「われわれには将来世代を産出し続ける絶対的な義務がある」という考え方にも決定的な根拠がな

²⁶ 「将来世代を産出する義務はあるか？」81頁。

²⁷ 同書82頁。

いと思われる。²⁸

森岡が単に素朴な個人主義的自由に基づいてこのような結論を引き出したとすれば、それはどこかで聞いたような凡庸な議論に過ぎないだろう。しかし、森岡は本論において素朴な個人主義的自由を方法的に採用している²⁹。私には、それは次のことを意味していると思われる。つまり、本論文は森岡が自らの信条である個人主義的自由主義を用いて将来世代の産出という応用問題を論じてみた、というものではなく、個人主義的自由という一つのツールを用いて、森岡自身の思想をその背後に暗示しようとしたものである、ということである。例えば、次のような記述がそれを示している。

人類の先祖たちが作り上げてきたものや、自分たちが生きてきた証を、ぜんぶまとめてゆっくりと丁重に埋葬することによって、それらに最後のやすらぎの場を与えるという結末があり得るはずだ…。³⁰

…（私は）人類の穏やかな自己消去についても、まじめに検討しておいたほうが良いと考えているのである。³¹

このような記述を読むと、単に「私たちには将来世代を産出する義務はない」というだけではなく、積極的に「私たちには人類を（緩やかな）絶滅に導く義務がある」と森岡は実は言いたいのではないか、と思えてくる。そうだとすれば、この将来世代産出論は、先にもその微妙なニュアンスを指摘した「悔いなく生き切る」生命学の人類全体への拡張を試みたものであり、その意味で、他者の産出の内在的な価値という視点をもたない森岡生命学の一つの現われである、と私は思う。

さて、「将来世代の産出」の問題はいわば類的存在としての人間における「産出」の問題を論じているのに対して、個人のレベルでの「産出」を問題にしているのが、「膣内射精暴力論の射程」³²である。この論文は、沼崎一郎が論文「〈孕

²⁸ 同書 102 頁。

²⁹ 「私は、以下の議論において、「個人よりも上位の価値をもつ実体」を置くことのないような個人主義の立場に仮に立脚し、その立場から「将来世代の産出の義務に対して何が言えるのかを考えていきたい。」（同書 81 頁、傍点引用者）

³⁰ 同書 101 頁。

³¹ 同書 103 頁。

³² 宮地（1998）が沼崎（1997）について指摘しているように、所謂「膣内射精」ではなくても妊娠をもたらす性行動はある。森岡の「膣内射精暴力論」という表現もその意味ではミスリーディングである。しかし、おそらく森岡は望まない妊娠を惹き起こす行動のうち最もシンボリックな行動として「膣内射精」を用いており、意味的には「妊娠をひきおこす性行動全般」を指していると思われる。本論は森岡の用語法に従って「膣内射精」をそのまま用いる。

ませる性)の自己責任」によって明るみに出した「中絶の背後にあっいままで隠されていた「男の避妊責任」というテーマについて独自の展開を試みようとするものである。

「膣内射精暴力論の射程」の議論の中心は、「強制膣内射精」と「強制妊娠を導いた膣内射精」の暴力性の区別である。前者は膣内射精を女性の意に反して行った時点で構成されるのに対して、後者は妊娠が判明した時点以降にそれが望まない妊娠である(あった)と認識された時点でその妊娠を引き起こした膣内射精が生じた時点へと遡ってその膣内射精が遡及的に暴力として構成される、という点で異なっている³³。そして森岡はそれを極端に拡張し、性交時点ではお互いに膣内射精に同意していたとしても後から関係が悪化して「やっぱり妊娠しなければよかった」となった場合には、膣内射精時点に遡及してそれが暴力だったことになることを主張する³⁴。その遡及は膣内射精後永遠に可能であり、時効は存在しない。つまり、膣内射精の「潜在的な暴力性」は永遠に不滅なのである。森岡はそれを「原罪」と呼ぶ。

…膣内射精から始まるすべてのいのちの誕生の背後には、潜在的な性暴力の影がぴったりと張り付いているということである。…すなわち、このようにして生まれてくる赤ちゃんは、その存在の始原において潜在的な性暴力の影を背負って生まれてくるということである。…これは、これらの人間が生まれながらにして背負わなくてはならない原罪ではないのか。³⁵

これはいかにも極端な主張であり、文字通り受け止めることは難しいように思える。一つの解釈として、江口聡はこの森岡の主張を「…「関係がだめになったら楽しいセックスも性暴力」「妊娠は潜在的には全て性暴力の結果」という森岡の示唆は法外に思えるが、好意的に考えるとおそらく森岡が考えているのは同意の問題の困難さではないか」³⁶、というように、性的関係における「同意」とは何かという問題として捉え、「…もし心理的に不安定な時点での同意は同意とみなしにくいということが言えるとすれば、性的に興奮しているとき

³³ 「…「強制妊娠を導いた膣内射精」の場合には、膣内射精を行った瞬間には、その暴力性は確定しない。その暴力性は、沼崎が言うように「潜在的」なものにとどまるのである。そして、実際に妊娠が判明して、それが女性の意に反していることが明らかになったときに、その原因となった膣内射精の暴力性が(事後遡及的に)確定するのである。」(同書 29 頁)。

³⁴ 「それはたとえば、妊娠後に男性が女性を裏切って不倫したり、妊娠した女性のもとから逃げたり、あるいは妊娠前から男性が他の女性と付き合いながら妊娠後にばれたりして、女性がその男性と性的関係を持ったこと自体を深く後悔し、そんな裏切り者の血を引く子どもが自分の胎内にいるということ、自分に対するこの上ない暴力だと感じた時である。」(同書 31 頁)。

³⁵ 同書 31 頁。

³⁶ 江口 (2008) 5 頁。

の同意は全て同意ではないということになりはしないか？」³⁷、というような議論へと繋げて論じていく。

しかし私は、それは森岡の膣内射精暴力論の本質を捉えていないと思う。たしかに性的同意は一つの重要な問題ではあるが、それでは性的関係をインフォームド・コンセントの応用問題の一つとして位置づけることになり、「新しい生命が産まれる」という性的関係固有の次元を捉えられないからである。

私は、上記のような結論を導く森岡の膣内射精暴力論は、「将来世代の産出」論と同じく、「他者の産出」に内在的な価値を見ない森岡生命学の現れであるように思う。つまり私は、森岡の膣内射精暴力論が示しているのは「もし私という存在が、常に既に必ず潜在的な暴力性を背負っているとすれば、私は（森岡の言うところの）「根源的な安心感」³⁸を原理的に持つことができないのではないか」という問いであり、それに対する「だから膣内射精を端緒とする産出は根源的な悪なのであり、ない方がよいのである」という回答であるように思う。これは、「将来世代を産出する義務はない」という先の森岡の主張とも重なりあう。

だがそこに留まることなく、この「膣内射精暴力論」と「誕生肯定論」を繋げた上で、その誕生肯定に「他者の産出」という側面を加えて考えてみると、その極端な主張のさらに深い意味が浮かび上がってくるように思う。それは、膣内射精は常に潜在的暴力だとしても、それによって産み出された他者の誕生を肯定することによって、つまりその他者を「生まれてきてくれて本当によかった」と祝福することによって、その膣内射精の潜在的な暴力性を最終的・決定的に消滅させることができる、という可能性である。言い換えれば、潜在的暴力としての膣内射精が、パートナー間の関係にとどまらず、それによって産まれてくるものとの関係へと広がっていったとき、つまり「孕ませる性／孕む性」という二項対立を超えた地平へと移っていったとき、それは暴力ではなく新しいものを誕生させる創造力として捉え返されるのではないか。その意味で、膣内射精は潜在的暴力であると同時に潜在的創造力ではないのだろうか。そして、先取りして言えば、そのような潜在的創造力を顕在化させること（つまり産まれた子の誕生を肯定すること）を通じて、その創造力の主体としての自己の誕生を肯定できるのではないだろうか³⁹。

³⁷ 同書 6 頁。

³⁸ 「ひとことで言えば、「たとえ知的に劣っていようが、醜かろうが、障害があろうが、私の〈存在〉だけは平等に世界に迎え入れられたはずだし、たとえ成功しよう、失敗しよう、よぼよぼの老人になろうと、私の〈存在〉だけは平等に世界に迎え入れられ続けていると確信できる」という安心感である。」（『生命学に何ができるか』 344 頁）。森岡は、「誕生肯定とは何か」の最後で、この「根源的な安心感」を得られるような環境を整備していくことが誕生肯定のサポートに繋がるとしており、それには私も強く同意する。

³⁹ 森岡は、『感じる男』において「思春期の男においては、（「勃起」ではなく）「射精」こそ

森岡は『生命学に何ができるか』の第五章の終わりで「男たちの生命倫理」というアイデアを示している。それは、それまでの男性研究者が目を背けてきた男性のセクシュアリティの問い直しを学問と接合するという点で画期的なものだ。「膣内射精暴力論」もその系列に含まれる。しかし、森岡がそこで挙げている「男たちの生命倫理」の四つの課題⁴⁰には、「男性としての自分にとってパートナーと子供をもうけることは一体どういう意味を持っているのか」というような、「子供を産む営みとしての性的関係」という側面が欠けているように思われる。だがそれこそが「男たちの生命倫理」の中心となるべき課題なのではないのだろうか。自らの男性性の解体や女性との関係の再構築だけではなく、自らが性的関係を有する女性が産む「子」という存在、そしてそのようにして自らの子が「産まれる」ということ自体が、自らにとってどのような意味を持つものなのかを問い直すと共に、その「子」との関係がどのようなものであるべきなのかを問わなければならないのではないだろうか。

3. 4. 他者の産出と自己の誕生肯定

ここで再び論文「誕生肯定とは何か」に戻り、森岡が「誕生肯定」論の三つの問題として挙げた中の最後の問題、「人生まるごとの肯定」と「誕生肯定」との関係」に私自身の回答を提出するかたちで、本論の中心となるアイデア「自らが産み出した他者の誕生を肯定することによる自己の誕生肯定」を改めて提示したい。

森岡は、「人生まるごとの肯定」から「誕生肯定」へと進むのは、自分にしかできない誕生肯定のかたちをこの世に生み出すことによって、それが「私はなぜ生まれてきたのか」という問い、つまり生きる意味の問いへの回答となるからである、と述べていた。しかし、先に「破断」論について論じた際に指摘

が男であることの象徴なのではないか、と私は考えている。その「射精」を、私は肯定的に受け入れることができなかった。そこでつまずいたおかげで、私は男へと変化していく自分の体の全体を、愛することができなかったのである」、と述べている。私は、個人的には射精を肯定的に受け入れることは可能だと思うが、射精を肯定的に受け入れるか否定的に受け入れるかに関係なく、ここで述べたような潜在的創造力としての射精は「それ自体として肯定的なものとしての射精」である。そして、そのような「射精観」に基づけば、森岡のようなケースであっても、射精を肯定的なものとして受け入れることができるのではないだろうか。

⁴⁰ 1. 「多くの男性のセクシュアリティの中に存在するところの、「見知らぬ女性と無責任なセックスをしたい。できれば自分にとってだけ都合のよいセックスをしたい」という欲望について」問うこと。(『生命学に何ができるか』274頁)。2. 「風俗産業とは何かを解明すること、そして風俗産業をどのように社会の中で扱っていけばよいかを考えてゆくこと。」(同書同頁)。3. 「自分自身にとって「真に満たされるセックス」とはいったい何なのかを、正面から解明すること。」(同書275頁)。4. 「人間に内在している「暴力性」について、男の立場から思索を深めること。」(同書282頁)。

したように、この誕生肯定論においては以前「生命学とは何か」において示されていた「生きづらさ」が論じられておらず、その点において、この「生きる意味」論も不十分であるように思われる。つまり、自らの生にしか達成できない誕生肯定のかたちがあるとして、それを達成して自らの生きる意味を認識できたとしても、私が死すべき存在であるということに変わりはないし、欲望に突き動かされていることにも変わりはない。私が破断を乗り越えて人生をまるごと肯定し、さらに自己の誕生肯定を達成して生きる意味を認識したとしても、死を前にしたときに、自らの生を引き継ぐものを全く持たないとしたら、私の人生もそのまるごとの肯定も、そしてそこで達成した私独自の誕生肯定も全て無に帰してしまうのではないだろうか。そのとき私は私の生の終わりとしての死を肯定することができるのだろうか。

森岡がその誕生論を自己の誕生に限定しているかぎり、それは不可能であるように思われる。私の直観では、森岡の誕生論において唯一可能なのは、自己の死を「世界の終わり」と同一視することで、私が達成した誕生肯定のかたちが冷凍保存されて無時間的に永遠に存在し続ける、というようなかたちでの死の受容である。そこでは私が死んだ後に世界があるかないかは永遠に不可知であり、したがって私自身の誕生肯定には何の関係もない。私が取り組むべきなのは、とにかくこの私の生を「悔いなく生き切る」ことだけなのである。

それに対して私は、私の生を引き継ぐものとしての他者を産み出しその誕生を肯定すること、即ち「他者の誕生」を肯定することによって、私は私の死を肯定することができるのではないかと考えたい。それに続くかたちで、私はその死の受容を可能にした他者を生み出した生命としての私自身の誕生を肯定できるのではないかと考えたい。つまり、「私が産み出した他者の誕生を肯定することを通じた自己の誕生肯定」が、自己の誕生肯定の基本的なかたちなのではないかと考えたい。

また同時にそれは、もうひとつの「生きづらさ」である「限りない欲望」の克服にも繋がるだろう。自分が死すべき存在であると知的に理解するのではなく、また孤立した実存として死の不安や恐怖に襲われるのでもなく、次の生命を産む生命には必然的にその限界としての死があるということを実感することで、限りない欲望は単に「満たすことが不可能」なものではなく「欲することが不必要」なものとなるだろう。なぜならそのとき、私の生は「そこでできる限り最大限の欲望の充足を目ざすアリーナ」ではなく「これからも引き続いていく劇的一幕」として理解されるからである。私はそれを「老い」と呼びたい。他者の誕生を肯定することで、私が「死ぬこと」と「老いること」が肯定的なものとして立ち現れてくるのである。

4. 生命の本質の一つとしての「産み」

ここまで、森岡の誕生肯定論やさらに広く「生命学」には「他者の産出」という側面が欠けていることを指摘してきた。本論の初めに引いた生命学の基本的発想には「生命について深く考え表現しながら」という一節があったが、そのときにはその「生命」とは何かについては後で論じると述べておいた。ここで最後に、その「生命」とは何かという観点から森岡生命学を参照し、「他者の産出」の考察を深めてみたい。

森岡は「生命学とは何か」のある段落で、「生命とは何か」という問いを取り上げ⁴¹、その特徴を、1) かかわり、2) かぎりがある、3) かけがえがない、の三点であるとしている。しかし、生命には少なくとももう一つ本質的な側面がある。それは、生命は他の生命を「うみだす」ということである。この「うみだす」という誰の目にも明らかな生命の特徴に森岡が気付いていないはずはないのだが、それを敢えて取り上げないのは、本論が繰り返し指摘している森岡生命学の特徴である。そこで私は、この「うみだす」という側面を森岡の挙げる生命の特徴に付け加えるべきだと考える。さらに言えば、「かぎりがある」と「かけがえがない」は、生命ではなくても、例えば実存のようなものにも本質的であるということが出来る。しかし「かかわり」と「うみだす」は、他にはない生命だけの本質であると思われる。したがって、その二点を生命の特徴の中核として位置づけ、「生命とはかかわりあってうみだすものであり、また逆にうみだすことでかかわりをつくっていくものである」というべきだと思う。

この「うみだす」という生命の一側面について森岡がどのように捉えているかについて、上記の三つの生命の特徴を挙げた部分の直前にある、次の一節を読んで頂きたい。

「生命」とは、生まれ、成長し、再生産に・関与し、老い、死んでいくというあり方のことである。「生命あるもの」とは、そのようなあり方でもって存在するもののことである。⁴²

一読して感じるのは、なぜ森岡はここで「再生産に・関与し」という持って回った表現を用いているのか、ということである。なぜ「…、生まれ、成長し、産み、老い、死んでいく…」と言わないのだろうか。

一つ考えられるのは、「女（人間）の本質は産むことであり、産まない（産めない）女（人間）は女（人間）ではない」というような言説に加担しないよ

⁴¹ 「生命学とは何か」455頁。

⁴² 同455頁、傍点引用者。

うに森岡が自らの表現を極めて慎重に選んでいる、という理由である⁴³。たしかに、「生命の本質は産むことである」という命題がそのような言説として読まれてしまう可能性は大きい。森岡自身がウーマンリブ運動の研究を行なっていたことから、その配慮は理解することができるし、「産み」を強調する本論も、その点には充分気をつけなければならない。しかし、だからといって生命の本質の一つが他の生命を産み出すことであることが事実であることには変わりはない。それは、「死ぬことが生命の本質の一つである」という命題が積極的安楽死の正当化に使われることに注意しなければならないとしても、その命題の正しさは変わらないのと同じである。

さて、そのような森岡の慎重さを踏まえても、上記のような持って回った表現の背後には、森岡生命学に通底する「産み」への関心の欠如があるように思われてならない。それを示す一つのイメージが、「さざ波のように伝わっていく連鎖」という森岡の「生命世界」のイメージである⁴⁴。

われわれの生命世界は、いま生きて存在している者のみによって構成されているわけではない。われわれの生命世界は、すでに死んでしまっこの世にはいないはずのひとや、生まれることのなかったひとや、これから誕生してくるはずの未生のひとによっても構成されている。それらの人々は、実在としてこの世界にいるのではなく、われわれの記憶の中、われわれの身体感覚の中、われわれの身の回りの空間の隅々に、風や響きや声や気配や質感として到来するのである。⁴⁵

森岡にとって、生命世界における「つながり」のイメージは、このような「風や響きや声や気配や質感」といった、静謐でクリーンで生々しさの排除されたものである。もちろん、激しい暴力性やドロドロした欲望という側面も指摘してはいるが、それらは負の側面として示されているのであり、生命の肯定的な側面としては、生々しい肉体の間の関係ではなく、上記のように限りなく薄められ細い糸でかろうじて繋がり合っているような関係として表現されている。他方、「うみだす」とは生命が生命を産み出すことであるから、生々しい肉体

⁴³ 脚注 24 参照。

⁴⁴ 森岡は、『生命学に何ができるか』の最終章で「生命学」の営みの一つの側面は「現代文明に組み込まれた生命世界の仕組みを、自分なりの見方で把握し、表現してゆく知の運動」(400 頁)。であるとし、その「生命世界のしくみ」の例として次の五つを挙げている。1)「かかわりあい」と「かけがえのなさ」、2)「いま生きているもの」以外からのさざ波のような連鎖、3) 生命世界の裏面としての「暴力」と「殺戮」、4) 際限のない「欲望」と、それが目指す「豊かさ」、それを裏付ける「自由」、5) 科学技術と生命の不可侵域。

⁴⁵ 同書 409-410 頁、傍点引用者。

と肉体の関係性においてしか成立しない。そんな暑苦しいものは森岡の生命世界のイメージに入り込む余地はないのである。私は、森岡のイメージする生命のネットワークとは、かけがえのない個体同士がかかわりあいながらも、それらのかかわりあい新しい生命を産み出すことはなく、全体が静かで穏やかな絶滅へと収束していくようなものである、と思えてならない。

しかし、生命としての私は、他の生命との生々しいかかわりを通して新しい生命を産むという次元を欠いてしまえば、もはや生命ではなくなってしまうのではないだろうか。そして、産むということを生命としての人間の条件であると考えれば、本論で検討した森岡の「私たちは次世代を産出する義務があるのか」という問いは、例えば「私たちはいつか死んでしまう存在である義務があるのか」という問いに等しい問いであることになる。両者は共に「人間は人間の条件を打ち捨てることによって人間をやめる義務があるのか」という問いであり、等しく間違った問いであるように思われる。

人は実際に絶対に死んでしまうのだから、死ぬ義務があるかないかを議論する意味はない、と言われるかもしれない。確かに、自分の選択の範囲内にある出来事のみ義務が成り立つとすれば、自分が産むか産まないかは自分の選択の範囲内にあるのに対し、いつか死んでしまうということは逃れようのないことであり選択の余地のない事だから、両者は異なったものだといえるだろう。しかし、少なくとも志向として、できるかぎり死なないことを志向して生きることは可能であり、私たちの選択の範囲内にある。そのような志向に基づいて生きている人にとっては、「私たちはいつか死んでしまう存在である義務があるのか」という問いは意味のある問いとして成り立つだろうし、彼らはそれに対して否と答えるだろう。そのとき彼らは、自己が死すべき存在であるというリアリティを喪失している（おそらく正確には、喪失することを欲している）だろう。それはおそらく、自らが生命としての人間であることのリアリティを失うことでもあるだろう。

同じように、森岡が「次世代を産出する義務があるのか」と問うとき、それは自らが生命を産み出す生命であるという自己理解の喪失の表出のように思われるのである。私が生命としての私であるかぎり、他者を産み出すことは私の本質だからである。

要するに、産出は森岡の問いのように義務としてではなく、自己存在のあり方そのものとして理解されるべきなのだ。つまり、「われわれ（理性的で自律的な諸個人の連合）は将来世代を産出する義務があるのか」を問うのではなく、「われわれ（生命としての人間）は将来世代を産出するものである」という自

己理解が必要なのだ。生命は、生まれ成長して死ぬものではなく、生まれ成長し産んで死ぬものなのである。産まないものはもはや生命ではない。

森岡はその誕生論においてハイデガーとアーレントを参照していた。しかし、両者は「誕生」を論じてはいても、「産む」ということを主題としてはいない。その「産む」ということを主題として論じているのが、レヴィナスである。彼は『全体性と無限』の第四部において、「多産性（繁殖性、fécondité）」という概念を軸に、他の人間関係とは異質な「子が産み出されるエロスという関係」や、他の他者との関係とは異なる「他者であると同時に自分自身であるという親子の関係」を論じている。その「多産性」は次のように定義されている。

私の未来は私の未来であると同時に私の未来ではなく、私自身の可能性であるとともに〈他者〉の…可能性なのであって、可能的なものが有する論理的な本質に組み込まれることがない…このような未来との関係は、可能的なものに対する権能には還元不可能なものである。その関係を私たちは多産性と呼ぶ。⁴⁶

レヴィナスは「多産性は、存在論的カテゴリーとして設定されなければならない」⁴⁷、と述べて、この「多産性」という概念は、単に私たちが生物の再生産を工業製品の生産から区別するための認識論的な概念ではなく、「主体の主体性それ自体の特徴として分析」⁴⁸すべきものだという。そして、私たちは多産的な存在であることによって、単に支えあって生きていくだけではなく、また逆に断絶しているものでもなく、自らの生を引き継いでいくものとしての他者とのかわりを持つことができる、という。

…多産性を欠くとき、《私》は、そこでいっさいの冒険が宿命の冒険へと転じてしまう、一箇の主体にとどまることになるだろう。（それに対して、）みずからのそれとはべつの宿命（=子）をもつことのできる存在が、多産的な存在である。父であることにおいて《私》は、避けがたい死という決定されたことがらをつらぬいて、〈他者〉へと繰り延べられてゆき、時間はその（親 - 子の）非連続性によって老いと宿命とに打ち克つ。⁴⁹

このレヴィナスの「多産性」の概念は、本論が生命の一つの本質として主張

⁴⁶ Levinas (1971) p.245 (邦訳 (下) 194 頁)。

⁴⁷ 同書 p.254 (213 頁)。

⁴⁸ 同書同頁。

⁴⁹ 同書 p.258 (222-223 頁)。

する「産み」と重なり合うアイデアである。ここで詳しくレヴィナス思想の検討をすることはできないが、他者論をその果てまで突き詰めたレヴィナスの思想において、この「多産性」の概念が重要な位置を占めていることをここで指摘しておきたい。

5. おわりに

本論を締めくくるにあたって、予想される二つの批判に対して回答をしておきたい。まず、本論では「産むこと」が「子を産むこと」に限定されているが、「新しいものを産出すること」には、例えば芸術作品や学術的著作を生み出すことも含まれるべきだ、という反論があるだろう。もちろん、それらも「産むこと」の一部と考えて問題ない。しかし、やはり「子を産むこと」が「産むこと」の中心にあることに変わりはない。すべての人間が「子を産むことを」やめて「芸術作品を制作すること」にかかりきりになり、その世代で人類が途絶えてしまえば、芸術作品を産み出す意味はないだろう。要するに、芸術作品の制作や論文の執筆は、その産物を受け取り引き継いでいくものを産み出すわけではない。その意味で、子を産むことは「人間がある」こと¹の条件—人間の存在の条件—であるが、芸術や学問は「人間である」こと²の条件—人間の様態の条件—である、と言えるだろう。どちらも等しく人間の条件ではあるが、その基礎をなすのはやはり前者である。

また、本論に対して「生命としての人間の本質が産むことだとすれば、産めない人間は生命ではないというのか、そして人間ではないというのか」という反論がありそうである。森岡がその誕生論において慎重に言葉を選んでいたのも、この反論を念頭においてのことである。もちろん、生物的に子を産むことができないとしても、上で述べたような何か創造的なものを産み出すことはすべての人間に開かれている事は間違いない（具体的な事物だけではなく、人と人とのかかわりを産み出すことも含めて）。その意味で、「すべての人間は産める人間である」。しかし、先に述べた不死の追求と同じく、この「産み」という営み全体を自ら拒否したり排除したりすることは、自ら自己を産まない人間とすることであり、その意味でもはやその人間は生命でも人間でもないものになってしまうだろう。その意味においてのみ、つまり「死なない人間は人間ではない」と同じ意味においてのみ、「産まない人間は人間ではない」。

さて、本論では森岡生命学には「産み」が欠けているともっぱら批判のみをおこなってきたが、実は「他者の産出」を中心軸にした本論のような議論を、森岡は「将来世代を産出する義務はあるか？」において「産出の哲学」として示唆している。

…ここにおいて、われわれは、「そもそも個人にとって、他の個人という存在の産出とはいったい何なのか」という根本問題に直面する。…この地点から「産出の哲学」が始まらなければならないことをここで指摘し、それを近い将来の検討課題とすることをここで確認しておきたい。⁵⁰

そこではこの問題提起以上の議論はなされていないが、これは森岡が今後「産出」を軸にして議論を展開していく可能性を示唆するものだといえる。そうだとすれば、本論の議論が今後の森岡の生命学および生命の哲学の展開に対して何らかの意義を有していることを願いたい。

他方で、本論の「誕生肯定論」批判、「生命学」批判は筋違いである、という指摘があるかもしれない。なぜなら、本論の初めに紹介したように「生命学」とは各個人が自分の実人生との関わりにおいて探求すべき個別的な営みなのであって、そこでは他人の生命学的な営みを参考にして自らの生命学的な営みに活かすことはもちろん問題ないとしても、その他人に対して「あなたの生命学には「産み」の要素が欠けている」などと、外から別の人間が口を挟むことは差し控えるべきだからである。

その指摘に対しては、本論は、私が森岡の生命学に触れてそれに共感した上で、それに対して抱いていた違和感を背景に、森岡生命学の批判というかたちでようやく開始した私自身の生命学的営みの序論である、と告白したい。それは、「かけがえがなく」、「かぎりがある」だけではなく、「かかわりあい」、「うみだす」ものから出発する生命学である。森岡は『生命学に何ができるか』の終わりを次のようなイメージで結んでいる。

われわれは、連帯しない。われわれは、自分の生きている地点にとどまったまま、それぞれの固有のメッセージを発信する。われわれは、この広大な世界の片隅で孤独に闘っている人々と微弱な電波を交信し、悔いのない人生を生き切るために、お互いに遠くからささえあってゆくのである。⁵¹

私はこのイメージに共感する一方で、このような薄皮にそっと触れるような

⁵⁰ 「将来世代を産出する義務はあるか？」93頁。

⁵¹ 『生命学に何ができるか』428頁。また、『宗教なき時代を生きるために』にも次のような類似の一節がある。「人間は孤独だ。しかし人間を孤独な状態のままで結び合わせることはできる。そしてそれこそが、宗教によらない、あらたな人と人とのつながりあいかたを準備するのだ。お互いに、相手の重さをけっして背負うことなく、そして親密な共同体や組織を作ることもなく、しかしやさしさと節度ある勇気を示し合えるような、そういうかかわり方があるはずだ。そういう未来を、私たちは作り上げていけるはずだ。」(66頁)。だが、「未来を作り上げていく」のは「産む」ことを欠いては不可能だろう。

ささえあいでは、結局、孤独な独我論というブラックホールへと引きずり戻されてしまうのではないかと思う。自分固有の苦しみを抱えたまま切り離された孤独な諸個人が「遠くから電波で交信する」のではなく、私が現在の他者とともに産み出す未来の他者へと私自身を委ねること。そういうかたちのささえあいを私は模索していきたい。

文献一覧

- Levinas, Emmanuel (1971) *Totalité et Infini*, Martinus Nijhoff. (熊野純彦 訳『全体性と無限 (下)』岩波文庫 2006 年)
- 江口聡 (2008) 「森岡正博「膣内射精暴力論の射程」へのコメント」京都生命倫理研究会配布資料 (2008 年 6 月 29 日) <http://melisande.cs.kyoto-wu.ac.jp/eguchi/papers/morioka200806.pdf>.
- ドストエフスキー (江川卓 訳 1979) 『ドストエフスキー全集 11・12 巻』新潮社.
- 沼崎一郎 (1997) 「〈孕ませる性〉の自己責任」『インパクション』105、p.86-96.
- 森岡正博 (1988) 『生命学への招待』勁草書房.
- (1996) 『宗教なき時代を生きるために』法蔵館.
- (2001) 『生命学に何ができるか』勁草書房.
- (2003) 『無痛文明論』トランスビュー.
- (2005) 『感じない男』ちくま新書.
- (2007) 「生命学とは何か」『現代文明学研究』第 8 号、p.447-486.
- (2008) 「膣内射精暴力論の射程」『倫理学研究』第 38 号、p.24-33.
- ・吉本陵 (2008) 「将来世代を産出する義務はあるか？」『人間科学』第 4 号、p.57-106.
- (2011) 「誕生肯定とは何か」『人間科学』6、p.173-212.
- 宮地尚子 (1998) 「孕ませる性と孕む性：避妊責任の実体化の可能性を探る」『現代文明学研究』第 1 号、p.19-29.